脱俗

私のアンソロジー 5

編集
解説 松田道雄

私のアンソロジー 5

脱俗

編集・解説

松田道雄

筑摩書房

私のアンソロジー　5

脱俗　編集・解説／松田道雄

編者略歴

松田道雄（まつだ・みちお）
1908年茨城県に生まれる。1932年京都大学医学部を卒業。初め困窮者の結核治療にあたり，戦後は開業医として幼児の治療にあたる一方，知識人のあり方やロシア革命に関する評論を発表。現在は著述に専念している。
（著書）「私は赤ちゃん」「君たちの天分を生かそう」「日本知識人の思想」「ロシアの革命」「革命と市民的自由」「恋愛なんかやめておけ」「われらいかに死すべきか」等。

1972年1月18日　初版第1刷発行

発行者　竹之内静雄

発行所　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2—8
振替東京 4123　Tel. 291-7651
郵便番号101-91

©1972　第5回配本　装幀／中島かほる
三松堂印刷・永興舎製本
1395-03305-4604

目次

I　さまざまの脱俗

ですぺら　辻　潤　3

自由人の条件　開高　健　7

八方やぶれ　富士正晴　28

自由だ、助けてくれ　寺山修司　37

反知性好みの知性派代表たち　横尾忠則　46

哀れな若者たちよ　飯沢　匡　53

II　反抗のすがた

元始女性は太陽であった　平塚らいてう　59

民主主義の寂滅　大杉　栄　68

無名作家の手記　田中英光　77

鷗外と不俗　桑原武夫　90
芸術は何のためにあるか　伊藤整　99
反俗精神　武田泰淳　115
伝統とは創造である　岡本太郎　148
俗情との結託　大西巨人　164
金銭観の問題　多田道太郎　191
ベトナム通信　飯沼二郎　214

Ⅲ　俗に抗して

不服従運動の遺産化のために　竹内好　223
戦後日本映画の状況と主体　大島渚　231
足跡　久野収　253
算盤のうまい復古主義者　斎藤龍鳳　271

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

対話ふうの解説　ほんもの、それは私だ　松田道雄　277
著者略歴　301

I　さまざまの脱俗

ですぺら——辻潤

人は誰でもみんなめいめいになにかしら人生観を持っている、意識的に或いは無意識的に。持たなければならないものではないが、みんな自然に持っている。

人生はただ一ツ、それを見る眼は千差万別だ。そこで色々様々な人生がその色眼鏡に反映する。

各人が各自の人生の中に生きている、そして各自は他人の色眼鏡の反映に相互に影響され合う。時代によって色眼鏡の全体の色彩がちがってくる、色の配合と混合とは絶えず移り変っている。

人はその各自の性格や、智能や、習性や、その他の色色から各自の個性を持つ、その色彩が薄ボンヤリしているのもあれば、強烈に光っているのもある。

みんな自分のかけている眼鏡が最上で正しいと考えているらしい、しかし、中には自分の眼鏡を信用せず、他人の眼鏡をも信用しない人間もいる。その信用しないというのも、彼の持つ一ツの人生観なのである。

この世は地獄で、どこか他の世界に極楽があると信じている人間、この世は今は地獄だが、今に天国が出現すると考える人間。現在は仮の世で、霊魂が肉体の牢獄に呻き苦しんでいると思う人間——数え立てれば際限がない、それ等を又一々各自にわけて分類し始めたなら、大変に厄介至極な話である。

うるさいのは自分のかけている色眼鏡をやたら他人に押し売りをしようとする奴だ。自分が考えて、信じているだけでは満足せずに他人にまでそれを押しつけようとする奴だ。

人はみんな自分の好き勝手な人生観を持つことが出来る、しかしそれを他人に押しつける権利はどこから考えてもありそうもない、しかし、押しつけなければ人生観ではないように考えている奴に遇ってはやりきれない、

己が今彼奴とケンカをするから御前も一緒になってケンカをしろという奴程厄介な奴はない。

ケンカはケンカのしたい奴だけがすればいいのだ。

どんな長い小説を書こうがそれは勝手だ、十年かかっても読み切れない小説を書こうとそれは勝手だ。しかし、その長い小説が世界で一番の大傑作だから、人間と生まれた者はみんなその小説を十年がかりで読破しなければならないなどといわれたらどうだろう。

読まないと死刑の宣告を下すなどといわれたらどうだろう。

六法全書を悉くそらんじなければ国民の資格がないなどといわれたらどんなものだろう。

文芸とはなんぞや？――そんなことが気がかりになる奴は勝手に気にしてその原因なり発生的理屈なりなんなり考えるがいい、考えたい奴に考えさせて置くがいい。

変態性慾だといって解決していられるならそれでもいい。

なんのために小説や詩を造るのだ？

己が芸術家だからだ、――それでもいい。

己の気持をラブさんに知らせたいから小説に書くのだよ。

己は詩人として天下に名声をはせて、自分の存在を明らかにしたいから詩を造るのだ。

実は楽に坐って金と名声とを両つながら得たいから芸術家になったのだ。

それは御随意だ、動機が不純だともなんだとも私はいわないだろう。

小説を書いて女を惚れさせるのも一ッの立派な才能だ、――ヘタクソな小説では中々いい女は惚れやしまい。

誰が金と名声とを欲しがらない奴がいるだろう、博士になって巨万の富を得て好きな熱を吹いていたら結構至極の御身分である。

タゴールでもメタリンクでもインヴァネスでもみんなノーベル賞金をもらっている。――だから世界的な文豪なのだ。

ホメロスの『イリヤス』、ゲエテの『ファウスト』、シエキスピアの『オムレッ』――はいずれも千古不朽のマスタアベーションだ。それ等を読まない奴は以って文学を語るに足りない。

歌をつくるなら『万ニョウ集』――ことだまがさきは

っているので読むのに恐ろしく骨が折れる――一体、字を覚えるだけで人生の半分暮らさなければ文学者になれない国などは随分と厄介なものだ。その他、色々と異人の言葉まで覚えさせられる、――自分の国の文学だけじゃ駄目で、西洋人の物まで色々と研究しないとエライ文学者にはなれない。

写実主義、自然主義、ローマン派、ヒュウマン派、ソシャル派、ブルジョイ、プロレ、表現主義からダダ派などと、名前を覚えるだけでもウルサイ。

自然主義の小説でもサンボリズムの詩でもローマン派のドラマでも階級意識に目覚めた文学でもなんでもみんな各自が好きなようにやるがいい。しかし、読むと読まないはコチラの勝手である。

私にはだがどうも今の日本で製造される文学が大半なくなっても別に苦にはならない、なにを読んでも面白くないからだ。

みんな相応に努力して書いているのにちがいない、おまえには書けまいといわれれば一言もない。私は最早、これ以上に僕の小説などを付け加える必要がないと思う。

私はただ自分の勝手なことをいっているだけだ、私が読まないからといって、それ等の文学の存在理由が消失するわけじゃない。私は誰が読まないでも、物を書きたい時は書くだろう。

無意味な文学を並べてダダイズムだといって新しがりもしよう。

だが、意味があるということは必ずしも価値のあるということにはならない。

千年も前に腐れ果てたような意味を今更ながら繰り返したところで別段値打があるわけじゃあるまい。

文芸は道楽じゃないといって頻りに真剣がる人もいるが、道楽がなにがわるいのか私にはわからない、なんによらずその道に溺れて夢中になるからこそ面白いのだ。イリュウジョンのある間が花だ。

文芸ばかりが道楽じゃない、政治だって宗教だって道楽だ、――みんな気狂い染みている。女に夢中になる奴は稍々ともすると心中もしかねない、みんな道楽の結果だ。

夢中になる物が存在している間は人間は生甲斐を感じもするだろう。

みんな自分の好きな道楽に夢中になるがいい、惚れれ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

ばアバタもエクボになる。好きな文芸がなにかしら高尚な精神的なものに思われたりするのは無理もない、――それで結構だ、側から兎や角いう必要はない。

みんな自分の書いた小説や詩が素バラしい傑作だと思っていればいい、――他の奴がなんといおうが問題じゃない。

自惚れが強い人間程、おめでたくその人は幸福だ。昔は自分が神の子で人類を救うために天降ったと信じた奴もいる、これなどは最大幸福人だ、まったく羨望に価する。

酒だって煙草だって初めからうまいものじゃない、それに中毒するようにならなければその味はわからない。

中毒するのが恐ろしければ初めから小説や詩などは読まない方がよかろう。

酒や煙草だってのまなければならないものじゃない、しかしのんだからといって別にわるいものでもなかろう。

人間は各自好きずきな人生観を持ち、道楽を持つ、まるで道楽のない奴もいる。しかし金をためることを道楽にする奴もいる。

みんな自分の好きなように生きるがいい、――それ以外にはなんにもありはしない。

諸君は僕の人生観や、文芸観に同意する必要は毫もない。

（一九二四年三月、日向宮崎にて）

（一九二四年、新作社『ですぺら』。一九七〇年、オリオン出版社『辻潤著作集4』所収）

自由人の条件　きだみのる——開高健

三月の或る曇った午後、田村町界隈の「王府（ワンフー）」という中国料理店の二階の一室で、私がきだみのるさんのくるのを待っている。昨夜思うように原稿が書けなかったので、ついウィスキーを飲みすぎてしまい、けだるくてしかたない。手や足のあちらこちらで青い、小さな火がくすぶっているようである。迎え酒で治そうと思って茅台（マオタイ）酒（チュウ）をさきほどたのんだがまだこないので、ジャスミン茶をすすっている。

二年前に帝国ホテルで開かれた或るパーティーで立話をしたきりきださんには会っていない。そのとききださんは、ロースト・ビーフに西洋ワサビをたっぷりつけたのを頬ばりながら、おれはヴェトナムの部落に住んで研究してくるつもりだ、そのあとラオス、カンボジャへまわるのだといった。部落には政府村とヴェトコン村と、そのどちらともつかないたそがれ村、三種あるが、どれを選ぶつもりですかと私がたずねると、氏は、知らねえよ、そんなこと、いってみなきゃわかるもんじゃねえ、といった。三種のうちどれをおとりになるのも結構だけれど、どの種にいても或る晴れた朝ふいに一五五ミリがとびこんできますぞ、絶対安全というところはどこにもない、無限定がアジアの特長ですぞと私がいうと、氏はそっぽを向き、声を低め、人間の住むところならどこにでも文化があるわナ、それを見てくるのだ、といった。二、三度まばたいた眼がふと暗がっているように見えたのはヒガ目か。

数年間会わないあいだにいくつかの噂を聞かされた。私の親しい友人の一人がきださんにごく親しくて、そこから信頼すべき情報が流れてくるのである。それによると、或る年、きださんはお寺でボヤをだし、気違い部落を追われたということであった。部落にはそういう掟が

あるとのことであった。しばらくすると、八王子市にできた新制作座のアパートの一室に入居を許されたらしいという。そのうち気違い部落にふたたび帰参を許されたらしいという。それからしばらく噂を聞かないと思ったら、とつぜん、近頃は湘南海岸に出没しているという噂がやってきた。何でも生涯最後の恋愛をするんだとかいって、銀座の某名店で背広上下を作り、英国製のセーターを着こみ、眼を瞠るような変貌ぶりであるという。相手は、と聞くと、それがよくわからないのだが、本人のいうところでは〝コンテッサの夫人〟（伯爵夫人）だそうだ、とのこと。いまどき伯爵夫人とはまた古風な、といってわれわれは大いに愉しんだ。そして大男の海辺の恋をひそやかに祝った。ところがしばらくするうちにそれが消え、今度はヴェトナムへいくといってるぞ、という噂がやってきた。われわれは生涯最後の氏の壮途をひそかに祝った。

三時。約束の時間どおりにきださんが部屋に入ってきて、それといっしょに待ちあぐねていた茅台酒もやってきた。今日は珍しくジャンパーに野球帽ではなかった。背広を着てネクタイをしめ、ベレ帽とも大黒さんの頭巾ともつかないものをあみだにひっかけている。髪はすっかり白くなっているが、眼光鋭く、太い背骨がまっすぐたち、肩も胸も厚く、荒あらしい手を重いスパナーのようにテーブル・クロスへそっとおく。昂然とした独立自尊の匂いのなかに一刷きの繊細な含羞がただよっている。ひところにくらべると頬の肉がゆるんでいくらかの衰えが翳っている。

開高　歯はいつお入れになったんですか。

きだ　去年じゃないかな。

開高　それまでは前歯一本しかなかったでしょう。ぼくが寿屋の宣伝部にいた頃はとても言葉が聞きとりにくかったですよ、日本語が。けれど、いつかどこかのホテルのバーでロベール・ギランと話をしていらっしゃるところを聞いたら、フランス語があんまりきれいなので、ビックリしたです。歯が一本しかないのにどうしてあんなきれいなフランス語がしゃべれるのかと思いましたね。

きだ　それは日本語のほうがわるいのだ。日本語はしゃべりにくくてしようがない。フランス語だといい

んだ。このあいだも佐藤美子さんがそういってた。フランス語をしゃべる機会がなくてというから、ではここでやろうといってしゃべったら、佐藤さんが、あんたあんな山のなかの気違い部落なんかにいて、どうしてフランス語が錆びないんだろうといったが、錆びないよ、イギリス語よりも。

開高　そうかしら。それからいつか奈良の〝白い共産部落〟（註・心境村のこと）へフランス人の記者をつれていって、いっしょに風呂へ入って、これは日本独特の習慣でフランスにはないだろう、これは一つの文化だぞというようなことをおっしゃったでしょう。あれはＮＨＫか何かの録音で、ぼくはほとんどラジオを聞いたことがないのだけれど、たまたまスイッチをひねったらやっていて、そのフランス語が十九歳の少年の朝みたいなフランス語でね（笑）。

きだ　おれの声は非常に若いのだ。

開高　びっくりした。玉をころがすみたいなの……。

きだ　これはまア、支那の皇后様の声みたいなことをいうが（笑）。

開高　田付たつ子さんのフランス語をぼくは生前に一度聞いたことがあったけれど、やはり定評どおりすばらしかった。それからきださんだな。このごろ若い人がとてもフランス語が上手になってきましたけれども、あの頃はなかなか聞けなかったです。きださんのはじつにきれいだったな。それが日本語になると一本歯から息が洩れてフガフガなの。何をいってるのかさっぱり（笑）……。

きだ　原稿を書いていて近頃きだは日本語がうまくなったとほめられたことがあったぞ（笑）。何だね、これは。何といって挨拶していいかわからなかったがね。

茅台酒をすするうちにようやく復調しだす。そうであった。何年もきださんは前歯一本だけでやっていた。それに舌をひっかけひっかけしゃべるので、しばしば返答に窮したことがあった。ハイといっていいのか、イイエといっていいのかわからないので、ついホホウとか、ハハアとかいってごまかしたものだった。

あれはポーランドから帰ってきた年であったから、七年前のことになる。安岡章太郎と二人で気違い部落へく

りだしたことがあった。赤のサン・テミリオンを二本持っていったと思う。ブタを一頭やっつけるからそれをまるまるドラム罐のなかで焼いたらうまかんべえ、というのがきださんの誘惑であった。山かいの貧しい村についてみると、ちょうど結婚式があって、村長の家では酒盛りのさいちゅうだった。きださんはしきりに儀式の折に村人たちが交わす挨拶の言葉や杯のまわしかたなどをたずねていた。そして式のあとわれわれを村長の家の物置小屋へつれこみ、七輪に洗面器状のデコボコ鍋をかけ、長大なるブタのアバラ肉一枚をそこにほりこんだ。そして塩とニンニクをバラバラとふりかけた。味つけといってはそれだけであった。ブタの密殺がうまく手に入らなかったので、すまんがこれでがまんしてくれと、きださんはいった。焼けるのか煮えるのかしてアバラ肉がジュウジュウと音をたてはじめると、きださんはナイフの刃をたててそれをズブズブと切り、ひときれ、ふたきれ、口にほりこんだ。そして、たった一本しかない前歯でホンの二、三度、もぐもぐとやってから、巨塊をゴクリと呑みこんだ。お愛想にちょっと挨拶してやる、といった嚙みかたである。

「こんな山のなかにこもってこういうものを食べていて、きださん、何ともありませんか？」

安岡章太郎がリュウマチがでるといって腰からしたを毛布にくるまってそうたずねると、きださんはサン・テミリオンをゴクリとラッパ呑みして、

「ああ、うめえ。久しぶりだ」

といったあと、

「鼻血がでるんだ。もう三日ほどしたら八王子へ走らなきゃならねえ。とてもじゃないが鼻血がでて、どうしようもねえヨ」

といった。

ギリシャ語の泰斗にしてはひどく夜店のマムシ屋めいたせりふだが、大好きなのである。何かというと、そういう癖がある。いつか銀座のドイツ料理店でブタの脛肉をいっしょに食べたことがあるが、酢煮キャベツをしこたまのせて巨塊をペろりと平らげたあと、英雄はたのしい義務を完遂した直後の人のようなそぶりでナイフとフォークをおき、眼を満悦でキラキラさせながら、

「これでまた鼻血がでるわナ、君」

ひどく古風な感動をつぶやくのであった。それにはし

たたかな自信の匂いがあった。私としては、英雄の誇りが古風であるとかないとかと考えるよりも、むしろそのゆるがぬ確信の口調にまたしても繊弱なる反省を誘われるのである。いったいに私はどんな洗練された、または野蛮なる栄養物を嚥下しても、いっこうに鼻血など、でたためしがない。栄養＝過剰＝奔出。そのような単純、強力な方式が成立する体質に、ああ、何とかなれぬものか。

安岡章太郎は洗面器に溜出した肉汁を茶碗にすくって、〝すごいソップだ〟といったが、母屋へ持って帰ってみると、たちまちのうちにジェリーのようになってしまった。それほど肉汁が濃厚であり、それほど山の冬の夜が寒かった。山からおりて八王子の駅についたら私はチャンポン呑みにあてられてもどしてしまった。翌日、安岡宅に電話してみると、オレ、リュウマチがでてしまった、というかぼそい声が聞えた。

開高　ぼくはきださんのものをずいぶん読んでる。『気違い部落』がはじめてでたとき、あれは昭和二十二年頃でしょう。ぼくがおそらく（旧制）高等学校に入った頃でしょう。食うものも食えず、世のなかは乱れ放題だったし。ぼくは絶望していて、食うためにパン焼工をしたり旋盤見習工をしたりしてました。日本の小説はワラジムシみたいなのが多かった。何にも精神の爽快というものがなかったときに、『気違い部落』が出たのですよ。あれはいささかペダンチックな趣きがあるけれども、けっして軽薄ではなかったし、じつに爽快、胸のなかを風が吹きぬけるみたいでしたね。明晰そのものなんだ。日本でうけ入れられない最大の文学的美徳は明晰という美徳ではないでしょうか。

きだ　そうそう。明晰がないために、日本はいろいろとややこしい。

開高　ちょっと日本をかじった外人に会うと、きまって四十からうえの日本の知識人は何をしゃべっているのかわからない。謎みたいだといいますね。このあいだオーストラリアの作家で日本のことを書いた本を読んでたら日本人の国民性は精神分裂症が特長だとありましたね（笑）。四十からしたもそうかもしれない。ぼくらもそうかもしれない。このあいだアメリカ人と会議をしたらさっぱりわからない、夜になってパーテ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo